韓国大学生日本語ディベート大会の取り組みと教育効果
――海外での「つながる日本語教育」のモデルケースとして――

藤　　美帆・諏訪　昭宏・藤原　祐子・鈴木　啓孝

（受付　2018 年 10 月 25 日）

1. 問 題 の 所 在

近年，日本語教育分野において「つながる日本語教育」が注目を集めている（西俣・熊谷ら，2016）。そこでは，ネイティブが用いる「正しい日本語」をあやつることよりも，日本語を用いて他者と「つながる」ことの方が重視される。そうした教育活動は海外でも試みられており（佐藤・熊谷，2011；上條・亀井，2015），オーストラリアの大学生たちに日本語が用いられる国際的な法的紛争を疑似体験させるというハイレベルな活動も行われている（アンダーソン，2010）。

上記の取り組みと同様，本稿で紹介する「韓国大学生日本語ディベート大会」[(1)] も，海外における比較的にハイレベルな日本語教育の貴重な実践例といえる。当大会は，韓国に有期契約で渡った若手日本人教師たちを中心として，現地で新たに誕生させた日本語関連の大会という特徴がある。その運営に参画した教師たちには，近年の韓国の大学教育を取り巻く風潮に対する危機意識の共有があった。すなわち，試験の点数重視，履歴書に記載するデータ重視の個人主義的な勉強に偏り，社会実践的な日本語コミュニケーション能力を養うための教育機会が不足していたことだ。この現状に一石を投じるべく，日本留学に行かずとも韓国で，あるいは日本から帰ってきた留学経験者たちが帰国後に，他者と「つながる」実践的な日本語能力を養成する機会が提供されるに至ったわけである。

本稿は 2 部に分けて構成される。前半第 2 章では，大会運営委員・大会出場チーム顧問兼監督の立場にあった教員の視点から大会の概要を紹介する。後半第 3 章では，大会運営の当事者ではない研究者の視点から，その教育効果について調査・分析した結果を報じる。最後に本稿のまとめとして，海外の日本語学習者たちが，自身や自国のあり方について複眼的かつ主体的に考えるにまで導く「日本語ディベート大会」の意義について論じたい。

2. 韓国大学生日本語ディベート大会の概要と活動指針

21世紀のグローバル社会では，情報や知識を取捨選択して活用する力や，自ら課題を発見

して解決する思考力が求められている。ディベートはこうした社会からのニーズに応え得る教育手段として期待されている。ただし，ディベートの形式は様々で教育効果も異なる。そこで本章では，まずディベートの一般的概念を説明し，続いて2012年に初開催された韓国大学生日本語ディベート大会の発足理由とその活動の方向性を概観する。

2-1　ディベートの一般的概念

ディベートは，「ひとつの論題に対し，２チームの話し手が肯定する立場と否定する立場とに分かれ，自分たちの議論の優位性を聞き手に理解してもらうことを意図したうえで，客観的な証拠資料に基づいて議論するコミュニケーション形態」であると定義されている。これがさらに，実践ディベート（法廷・学術・政治）と教育訓練ディベート（教室・競技）の２つに区分され，このうちの後者は，パーラメンタリー・ディベート（幅広い教養と即興でも流暢に話せる語学力を要請）とポリシー・ディベート（証拠資料と綿密な準備による質の高い議論を要請）の２つに大分できる（松本，1996）。

競技ディベートといえば，試合での弁論の巧拙，即興での口の上手さ下手さがイメージされがちである。だが，実際は試合に臨むために行う準備が最も重要なのであり，この事前準備の段階でこそ，より多くを学習するのだ（茂木，2002）。読む・書く・話す・聞くの「言語４技能」はもちろん，論理的思考力や批判的思考力などの「高度思考力」，情報の収集力・分析力といった「情報活用力」，そして何より，グループワークで求められる「協働力」を効率的に育成できることが証明されている（Stewart & Pleisch，1998）。つまり，グローバル社会で必要とされる，いわゆる「21世紀型能力」や「社会人基礎力」の養成が期待できるため，近年ディベートは教室活動で取り入れられるのみならず，各種の競技大会として普及しているわけである。

2-2　大会開催に至るまでの背景

1950年に英語によるディベート大会が始まった日本では，現在，小学生から社会人まで幅広い世代を対象に英語や日本語でのディベート大会が全国規模で開催されている。韓国でも，ここ数年の間に英語と韓国語によるディベートの大会が開催されるようになったが，当大会が開かれるまでチームで行う日本語ディベートの大会は存在しなかった。韓国の日本語学習者数は世界総数の約15％を占め，高等教育でも約５万人が日本語を勉強しており（国際交流基金，2017），大学入学時に日本語能力試験（以下，JLPT）Ｎ１を所持する学習者が少なくない。しかし大学の教育現場では，アーティキュレーションの欠如のため，高度な日本語の実力を試したい学習者の欲求を満たせないという問題が表面化していた。その上，上述した点数重視主義と個人主義の風潮も手伝って，時代が求める実践的な日本語能力を育成する機会

が必ずしもなかった。

こうした情勢を踏まえ，2010年頃，釜山地域の大学で勤務していた日本人教師の有志を中心に，大学生対象の日本語ディベートの大会を立ち上げようという気運が高まったのだ。

2-3　大会組織と大会規模

2011年の秋に大会運営委員会が発足し，同年11月，釜山地域の８大学によるプレ大会が実施された。その後，約１年間の準備期間を経た2012年９月，在釜山日本国総領事館・釜山日本人会・大会運営委員会の主催，国際交流基金などの後援のもと，第１回韓国大学生日本語ディベート大会が開幕した。翌2013年には，在大韓民国日本国大使館公報文化院も主催に加わってソウルでも運営委員会が誕生し，ソウル地区大会が開催されるに至った。

当大会は，まず第１週目に釜山地区とソウル地区の２箇所で地区大会を実施し，その翌週に地区大会突破チームを対象とした全国杯を開催する形を採用しており，韓国内では最大規模の日本語関連大会といえる。また，高度な思考力と言語能力が要求されるために日本語関連大会の中では最も難易度が高く，まさに韓国における「日本語の甲子園」といっても過言ではない。プレ大会から2017年の第６回大会までの間，総計28大学から，延べ79チーム315名の大学生が参加した。

2-4　論題と大会フォーマット

ディベート大会を行うにあたっては議論の対象となる「論題」が重要である。価値論題，事実論題，政策論題の３つに分けられ，どの論題を扱うかは目的によるが，既存のディベート大会の多くは政策論題を扱っている。この点は当大会も踏襲しており，運営委員会で毎回約２か月かけて調査し，選定している。過去６大会の論題は次の表１の通りだ。

表１　過去６大会の論題

第１回大会	韓国は積極的安楽死を法的に認めるべきである
第２回大会	韓国は選挙の棄権に罰則を設けるべきである
第３回大会	韓国は自動車取得時に駐車スペースの確保を義務付けるべきである
第４回大会	日本は外国人労働者の受入れを拡大するべきである
第５回大会	韓国は育児休業制度を義務化するべきである
第６回大会	韓国は119救急車の利用を有料化すべきである

当大会は，主張を行うために証拠資料の提示を必要とするポリシー・ディベートを採用しており，大会出場チームには，論題についての十分な調査期間（約２，３ヶ月）が与えられ

る。これは，幅広い知識と言語の流暢さが求められる即興型ディベートに比べ，証拠資料を必要とする準備型ディベートは，既述の「高度思考力」「情報活用力」「協働力」を養成する上で非常に効果があるとされているからである。また，個人的な偏見を排して複眼的に物事を考える力を養うため，各チームは地区大会の予選ブロックで肯定側と否定側の両方の立場から 1 試合ずつ，計 2 試合を戦う。1 チームは立論・質疑・第 1 反駁・第 2 反駁の 4 人で構成され，試合は肯定側・否定側ともに，立論（6 分)→質疑（3 分)→第 1 反駁（4 分)→第 2 反駁（4 分）の流れで進行する。

2-5　大会参加大学における日本語ディベート活動の諸形態

2011年 9 月，大会運営委員会の発足に合わせて，釜山地域に所在する各大学では日本語ディベート大会出場に向けた活動が開始された。大学ごと，これまでの活動の形態は多様であるが，本稿では 2 つの大学（以下，A 大学，B 大学と表記）の2015年度における活動実績について，顧問兼監督を務めた日本人教師の立場からの総括を述べる。

A・B 両大学は，釜山市内にキャンパスを構える私立総合大学である。日本人教師の指導のもとで2011年のプレ大会以来2014年の第 3 回大会まで 4 年連続で大会に出場し，キャンパスが近隣に所在することから毎年練習試合を行うなど，ディベートを通して積極的に交流してきた。だが，5 年目の2015年10月開催の第 4 回大会では，会場校となった A 大学が釜山地区大会の予選ブロック敗退で終わったのに対して，B 大学は釜山地区大会に続いて全国杯でも優勝し，結果の明暗が分かれた。次章で詳述する教育効果を検証するためのインタビューは，同大会にこの 2 大学から参加したメンバー全員（9 名）を対象に採録している。

2-5-1　A 大学のケース――ディベート・スタディ（自主ゼミ）

A 大学は，毎年の大会ごとに日本人の顧問教師が選抜した 4 人の学習者が「ディベート・スタディ」という名の自主ゼミを行っている。第 4 回大会の会場校となることが決まって大学や学科からの期待がかかり，それを受け，優勝を目指して前年度から準備を始めていた学習者Ａ 1（立論）とＡ 3（第 1 反駁）の 2 人に，2015年度の開講早々，新たなチームメイトとして学習者Ａ 4（第 2 反駁）が加わった。彼は交換留学で訪れた日本の大学で初めて日本語での討論を経験し，より深く勉強してみたいと思いながら帰国した矢先，大会経験者の勧誘を受けたのだった。最後のメンバーＡ 2（質疑）は，1 学期の途中，教師のスカウトに応じて合流した。彼女は日本語学科ではなかったが，学内の日本語関連大会に出場するなど教師の目に印象的な学生だったため，加入を促したところ快諾を得たのだ。

チームとして初めての対外試合は，6 月に行われた B 大学との練習試合だった。前年度の第 3 回大会と同じ論題だったため，準備では前年度メンバーのサポートが得られた。その過

程で，学習した理論を実践するための要領がメンバー全員に共有されていったのである。やがて本大会の論題が発表され，いよいよディベート・スタディの活動が本格化した。夏休み期間の７月に開催される公式模擬大会に向けた４週間は，週末を除いて毎日６時間以上が準備にあてられたが，この間，夕食をともにし，地下鉄の終電時間近くまで大学に居残り，家族よりも長い時間を一緒に過ごしたことによって，同じゴールを目指す仲間としての絆が深まっていった。７月の公式模擬大会の終了後には，相対的な完成度の高さで審判から高評価を受けたものの，学習者たち自身が現状に満足しなかったため，８月になっても夏休みのほとんどを返上して大学に集まり，大会本番に向けた準備が続いた。

証拠資料の収集と理論立ての段階で悩み苦しんだ期間が長く，意見が合わなかったり，まとまらなかったりしたこともあった。しかし，それが原因で４人のメンバーが仲違いするようなことはなかった。自校開催の大会でよい成績を必ず収めたいという，過去のどのチームよりも強い気持ちが共通分母にあったため，常に協力する姿勢を崩すことなく，お互いの事情を許諾し合いながら，大会準備期間を過ごしたのだった。

2-5-2　B大学のケース――ディベート・サークル

2011年の大会運営委員会発足とほぼ同時に，Ｂ大学では日本人の教師が顧問となった日本語ディベート・サークルが誕生したのだが，第４回大会出場を目指した第４代目のメンバーたちの活動は，例年以上の苦難とトラブルの連続に直面した。それは一言で，男子の学習者Ｂ３（第１反駁）の情熱と，その空回りの結果だったといえる。学科内の成績優秀者という自負とやる気に満ち溢れ，資料調査などの活動に熱心に取り組むが，他者とのコミュニケーションに問題がみられたＢ３。対して，日本での留学経験や就労経験に裏打ちされた高レベルな日本語の会話能力を誇りつつも，ディベートや大会出場への意欲が相対的に乏しかった女子の学習者たち。両者の間の葛藤はしばしば表面化し，時に爆発した。大会前の６月，恒例行事だったＡ大学との練習試合では，メンバーの仲の悪さとそれによる準備不足とを露呈し，肯定側・否定側の２試合ともに惨敗という結果に終わった。チーム状態の悪さはライバルであるＡ大学の学習者たちからも心配され，なぐさめられるほどだった。この年，最終的に６名もの女子メンバーがサークルを去っていった。

教師による介入も数次行われたが，練習試合後，サークルに残ったメンバーだけの話し合いがもたれ，Ｂ３は自らの傲りを詫びた。そこから徐々に，戦う集団の意思が形成されていく。日本留学を終えて韓国に帰ってきたばかりの女子の学習者Ｂ１（立論）と，社会人生活と主婦生活を経て中断していた大学での学業を再開させた学習者Ｂ２（質疑）は，日本語のアナウンス力に秀でるのみならず，他者を受容できる優しさをもっていた。本格的な日本語学習を始めたばかりの学習者Ｂ５（サポート）は，持ち前の穏やかな性格でチームを裏から

支援してくれた。そして，男子では一番の年長者で推進力にも優れた学習者Ｂ４（第２反駁）が，リーダーとして全体を統制した。本大会の論題が発表され，苦しみながらの準備をして臨んだ翌７月の公式模擬大会では，肯定側・否定側ともに勝利し，「自分たちもやれる」という自信をつかむに至る。こうしてサークル崩壊の危機が乗り越えられ，５人それぞれの長所を融合させた１つのチーム体制が，大会本番直前にようやく確立したのである。

3.　ディベート大会の教育効果

本章の目的は，韓国大学生日本語ディベート大会の教育効果を明らかにすることである。準備期間を含む大会への参加体験を通じて，学習者は何を感じ，何を得たのかについて検討する。本調査の担当者は，釜山市内に所在する大学に赴任していた2014・15年度の２年間，大会運営委員会の依頼を受け，当大会及び関連行事に審判として参画した。大会の運営委員ではなく，出場チームの顧問兼監督の立場にもなかったが，大会に挑戦した学習者たちが劇的に成長してゆく姿に大きな感銘を受け，ここには極めて重要な教育効果があるとの確信を得るに至った。そのため当事者ではない第三者の立場から，大会を調査・分析する役を買って出ることにしたのだ。

外国人学習者を対象とした日本語教育でディベートを活用した教室活動を行った場合，その効果については日本語能力の向上に主な焦点があてられる（高橋，2015）。だが，当大会の教育効果はそれのみにはとどまらない。そこで，大会当日の様子を目撃した時の直観による確信をより客観的なものとなすべく，模索的な質的研究を試みることにした。

3-1　調査及び分析の方法

2015年10月３日に開催された第４回韓国大学生日本語ディベート大会・釜山大会に出場した全６大学６チームから，A・B 両大学の２チーム計９名の学習者の協力を得て，2016年２～３月に，１～１時間半程度の半構造化インタビューを実施した。主な質問項目は，「印象に残っていること」「学んだこと」「得たこと」「困難だったこと」であり，学習者たちには，準備期間を含む大会参加を通じて，得られた経験や学びについて自由に語ってもらった。インタビュー協力者の概要は，次頁表２の通りである。

インタビューで得られた音声データは，文字化し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）を用いて分析した。木下（2003）では，M-GTA の分析結果は「人間の行動や他者との社会的相互作用の説明や予測に有効」（p.135）であり，「分析焦点者を中心とした人間の行動や相互作用の変化，うごきを説明する」（p.218）と述べられている。本研究課題と照らし合わせた結果，調査者は M-GTA が最も適切な分析方法と判断した。以下，本稿の

分析も木下（2003）の手順に従う。また，分析の妥当性を検討するため，概念，サブカテゴリー，カテゴリーに関しては，A大学及びB大学の教師の協力を得て，確認してもらっている。この分析法では質的データの解釈が中心となるため，以下，結果と考察をまとめて報告する。

表2　インタビュー協力者の概要　（2016年3月時点）

所属大学	大会での役割	略称	性別	国籍	年齢	専攻	学年	JLPT	日本留学経験
A大学	立論	A1	男	韓国	24歳	日本語	3年	N1	なし
	質疑	A2	女	韓国	23歳	経営	4年	N2	交換留学半年
	第一反駁	A3	男	韓国	24歳	日本語	4年	N1	なし
	第二反駁	A4	男	韓国	24歳	日本語	4年	N1	交換留学1年
B大学	立論	B1	女	韓国	24歳	日本語	4年	N1	交換留学1年
	質疑	B2	女	韓国	36歳	日本語	4年	N1	なし
	第一反駁	B3	男	韓国	23歳	日本語	3年	N1	交換留学予定
	第二反駁	B4	男	韓国	25歳	日本語	3年	N1	なし
	サポート	B5	男	韓国	23歳	日本語	2年	未受験	なし

3-2　結果と考察

分析の結果，29の概念が生成され，4つのカテゴリーに分類された。また，分類の過程で7つのサブカテゴリーを生成した。

3-2-1　カテゴリーの内容

まず，インタビューデータの具体例の一部を用いて，各概念とカテゴリーを詳細に説明する。なお，文中における＜　＞は概念，【　】はサブカテゴリー，〔　〕はカテゴリーを表している。また，……は調査者による省略を示し，そのままでは意味を取りづらい箇所に関しては調査者が前後の文脈から解釈し，補足を加えて（　）内に追記した。

①〔日本語学習〕

カテゴリー〔日本語学習〕は，＜日本語接触機会の増加＞と＜日本語力伸長感＞の2つの概念で構成されている。大会参加動機についてはB1，大会終了後の日本語能力の伸長感についてはA3のインタビューでの発話を引用する。

B1：私は留学して，復学してすぐ，募集の紙をみましたので。帰ってから，日本人と日本語で話す機会が少なかったんです。……（このままだと日本語を）忘れると思っ

て，日本語を話せる機会を作りたい。それが一番の（参加動機でした）。

Ａ３：日本語力は，そりゃあ伸びたっていうか，必ずそれは伸びると思います。努力した分，それは絶対に伸びると思います。

②〔日本のアニメでみた憧れの青春の疑似体験〕

カテゴリー〔日本のアニメでみた憧れの青春の疑似体験〕では合計16の概念が生成され，その過程で５つのサブカテゴリーに分類された。

第１サブカテゴリー【夢中になる準備期間】には，＜もてる時間をすべて捧げる＞＜初めて１つのことに打ち込む＞＜個人の事情や日常生活との両立＞の３つの概念が包摂されている。大会直前の約１か月間は，Ａ・Ｂ両大学ともに，連日１日６時間以上の練習が行われていたことが確認された。そうした取り組みの前提として必要だったのは，個人的な事情とグループでのディベート学習の両立だった。

第２サブカテゴリー【初めての共同活動】は，＜高校時代の放課後の思い出は夜間自律学習＞＜韓国における部活動体験の希少性＞＜チームメイトとの疑似合宿＞＜共通の目標に向かって努力する団体活動＞の４つで編成された。韓国の高校生の大半は，学食で夕食をとった後，22時頃まで学校に残り，「夜間自律学習」と称する個人勉強を行う。そうした経験をもつＢ５は，部活動体験の珍しさについて次のように語っていた。

Ｂ５：（日本のアニメでみるような部活は）韓国にはほとんどないから。俺たちの学校にはないから，これは，うらやましいなあって思いました。……部活をやっている人はいるんですけど，ほとんどの人は毎日勉強だから，ないです。部活は。

第３サブカテゴリー【連帯感】は，＜仲間と達成感を共有＞＜仲間に想いを託す＞＜チームのための自己犠牲＞の３つで構成されている。学習者は，準備期間中も目当ての資料を発見しては達成感を感じ，その思いを仲間と共有していた。Ａ２は次のように述べる。

Ａ２：自分の意見に合う資料を探したら，本当に嬉しくて，「これ，探したー!!」ってみんなで叫びながら。

また，そうした出来事の繰り返しにより，仲間に想いを託し，チームのための自己犠牲を厭わないほどの連帯感が形成されていた。これに関しては，日本語の実力が不足して選手として大会に出場できず，チームのサポート役にまわったＢ５が語ったことを示す。

Ｂ５：悔しいでしたけど，私よりもっと上の人がいたら，その人がやらなきゃ。私は外で。そんな感じで毎日やりました。……私が出ると，弱いから。……（それでも）自分の出した資料が採用されて，そこで，資料が活躍しているから。

第４サブカテゴリー【衝突】は，＜チームメイトとのいざこざ＞＜選手選抜の際の困難＞＜男女の軋轢＞の３つの概念で編成された。大会参加を通じてチームの連帯感や達成感が得られる一方，学習者たちは数々のトラブルも経験する。まずはＢ大学から，男子の学習者Ｂ３と女子の学習者たちとの間で起きた衝突を例示する。リーダーに任命されたＢ４は，チーム内の衝突について次のように語った。

Ｂ４：（男女間の葛藤が）まあ，よくあったんですよね。Ｂ３とか。……Ｂ５と私と３人で，Ｂ３の家で酒を飲んだこともあります。……まあ，男のように対応することは危険だなって。……「不満をいってください」っていっても，全然いわない。

Ｂ大学に比べて比較的に衝突が少なかったＡ大学でも，長いグループ活動期間中にまったく問題が発生しなかったわけではない。Ａ１の証言を引用する。

Ａ１：（喧嘩に）なったことはあります。……（自分は）一応状況をみるタイプなので。状況をみて，あの２人（Ａ２とＡ３）が解決できなかったら，私が（双方の意見を聞いていました）。……（喧嘩の原因は）お互いの意見の対立ですね。

第５サブカテゴリー【縦と横の絆】は，＜指導教員への感謝＞＜同じ地域の他大学のチームとの仲間意識＞＜複数年度にわたり立場を変えて継続的にかかわる＞の３つで構成される。上述の共同活動を経て，仲間との絆が形成される。Ｂ大学の場合，チームメイト同士激しく対立してしまっても活動を続け，最後まで諦めなかったために，いつしかサークル崩壊の危機が乗り越えられ，大会終了後には仲間としての絆が形成されていた。女子の学習者Ｂ１は，当初関係が良くなかったＢ３について次のようにいっている。

Ｂ１：最初に（Ｂ３は）本当におかしい人だと思っていて，（女子は）みんな不満をもってて……（でも，活動を通じて）私が思っていた人ではないなって。……真面目な人なんですけど，その方法が間違えたなって思いました。……（本人も欠点を）努力して直そうとしている。……頑張っていることをみんな知っているから。

さらに特筆すべきは，ここで示す仲間の概念が，チーム内だけでなく同じ地区の他大学にまでも広がっていることだ。これは，地区大会での敗退が決定したＡ大学が，ライバルであるＢ大学のメンバーに自分たちが準備した資料を託した，という現象に象徴されている。それぞれのチームでリーダーを務め，資料を託したＡ３と，それを受け取ったＢ４は，その時の心境について，各自，次のように述べた。

Ａ３：今年は釜山圏で全国優勝して欲しいって[(2)]。（予選で）落ちた瞬間から，他の大学はどうかわからないですけど，みんな仲間みたいな。自分ができなかったものを頼むっていうか，叶えてほしい。託すって感じで（自分たちの資料を全部）渡したんです。……私たちがそこに行きたかったけど，できないから，代わりに。

Ｂ４：必ず勝つべきだなって。（資料をもらったというよりは）気持ちをもらった感じ。なんかその前は敵ですよ。……（それなのに資料をくれて）やはり，一緒にディベートを準備した仲間，大会の仲間かなって感じがして，感動しました。

以上のような５つのサブカテゴリーにまとめられた体験は，海外の学習者にとっては〔日本のアニメでみた憧れの青春の疑似体験〕であると考えられる。海外の学習者は，部活動という日本特有の学校文化についてアニメや漫画などによって間接的に体験し，認知している。こうしたものへの憧れについて，Ａ３は次のように語っていた。

Ａ３：運動系のアニメをみたら，部活動で全国大会とか，そういう感じの部活やってるから。韓国の部活はそういうものではないから。……（日本では）試合をして，全国大会に行ってっていうような。連帯責任とかももちろんあって，負けたり勝ったりしてみんなで泣いてっていう。……その部分が憧れなんじゃないかな。

このように，間接的な体験により憧れを抱く日本ならではの学校文化だが，学習者は同大会を通じて直接的に体験できたと感じていた。以下，全国大会への進出が決まったＢ大学に資料を託したことについて話していたＡ２が，続けて語り出した部分を引用する。

Ａ２：（ここで体験したことは）日本のアニメの中の世界ですね。本当に韓国にはないものって思って。……憧れでしたね。……韓国は，受験のために走っているんですから，みんな１つの目標ですけど，自分１人で走っていけばいいんですよね。そういう競争の世界ですから，協力をそんなにしないんですよね。……（苦労して集めたＡ

大学の資料を予選敗退した後にＢ大学に渡したのは）釜山が勝ってほしい。……お前たちは私たちに勝ったから負けてほしくない。……それ考えたら，本当にアニメみたいですね。

③〔人生で一番の強烈な感情〕

上述の〔日本のアニメでみた憧れの青春の疑似体験〕を通じ，学習者たちは図らずも，初めての激しい感情に衝撃を受けていた。カテゴリー〔人生で一番の強烈な感情〕は，＜涙が出るほどの嬉しさ＞＜涙が出るほどの悔しさ＞＜初めて経験した連帯責任の衝撃＞という３つの概念で構成されている。まず，全国大会優勝校であるＢ大学の学習者たちであるが，最終的な試合の結果を受けて感じた衝撃は，Ｂ１の以下の発話に代表される。

Ｂ１：なんか夢みたいに感じました。……優勝と聞いた時，なんか，（気持ちが）あがる。それで，本当にびっくりして，泣いちゃったんです。……私の人生で初めて感じる，人生初の感覚。

Ｂ３：最初はなんか涙が出そうな感じがあったんです。……我慢っていうか，頭がぼーっとして。……今回みたいにこういうふうに準備して，辛さを感じて，こんなにいい結果をもらったことは初めてです。

こうした激しい感情は，試合の勝敗の結果にかかわらず，人生で一番の強烈な感情として捉えられていた。地区大会を突破することができなかったＡ大学の学習者たちは，結果発表の瞬間に感じた悔しさを次のように振り返る。

Ａ４：これくらい悔しいという感情は初めて感じたんじゃないかなって。……ああいう過程が初めてだったので。……初めて本気で頑張った。だから泣きたくなった。

Ａ３：（予選敗退した瞬間の感情は）人生で，たぶん一番強烈な経験だと思います。その，ディベート大会の時の悔しさ……みんなに申し訳ないって。自分の甘さでみんなに迷惑かけた……JLPTの試験では自分のだけの問題じゃないですか。……自分だけが合格できない。でも，ディベート大会って４人で一緒に，先生も含めて５人一緒に頑張って，ここまでいったものを自分のせいで……みんなの今までの努力を台無しにしちゃった，みんな頑張っていたってことを知っていたからこそ，辛かったんです。

④〔今後を生きていく上での指針〕

カテゴリー〔今後を生きていく上での指針〕では８つの概念が生成され，その過程で２つのサブカテゴリーにまとめられた。

まず，第１サブカテゴリー【自己の客観視】は，＜チームメイトとの比較に基づく自身の強み＞＜他校生との比較に基づく自身のレベル＞＜大会に関する自身の取り組みの反省＞＜自身の欠点や不足している部分への気づき＞＜欠点を直すように意識＞＜過去の失敗経験にあてはめる＞の６つで構成されている。

学習者たちは，準備期間中チームメイトとの比較を通して自身の長所や短所を自覚していた。まずはＡ１の発言である。

Ａ１：私は，（チームの）他の３人より発想力といいますか……自分からアイディアとか考えとかをすぐに出すのができなくて。……（役割を決める前の練習段階で）立論以外は全部うまくできなくて。そこで自分にがっかりして。……ディベート大会を通じて，それがわかったと思います。……（今までは）そんなに，大きく実感したことはなかったんで。

そして，そうした他者との比較はチーム内のみにとどまらない。同じ大学のメンバーからは一目置かれる存在であった者も，大会参加を通じて他大学の学習者と関わることにより，自身を客観視する契機を得ていたことを確認した。また，大会終了後には，自身の失敗体験を振り返り，その原因を具体的に分析しようとする姿が窺えた。これに関しては，予選敗退の原因は自分にあると，強く責任を感じていたＡ３の事例を示す。

Ａ３：たくさん資料収集したから大丈夫やんっていう，甘い考えを持っていた。……自分はそれ（適切な場面で証拠資料を取捨選択して対応すること）がちょっと弱いなって。……自分ができなかった部分が，緊張して，大会当日はもっとできなくなった。その部分では自信がないけど，そこを強化するような練習をするわけじゃなくて，自分の得意な部分を中心に練習して。……自分の悪いところがまた，その大会で（出た）。……高校３年生の時，大学に行くために，外国語能力を使ったAO 入試（に備えて），７月のJLPTで１級に合格しなければならなかった。……N１持ってたら（難関国立大学の）AO 入試に使えた。……それも同じような感じでできなかったんじゃないかな。……（アニメ好きだから）得意な聴解ばっかり練習したりとかして。苦手なものから逃げる傾向がある。……自分のできないところがはっきりわかった。なおそうとしています。そういう部分。

以上のように大会での反省点を自身の過去の体験へと結び付け，自身が改めるべき点を見出すという事例は，予選で敗退したＡ大学の学習者に限らず，Ｂ大学の学習者にもみられた。準備期間中，サークル内で他のメンバーとの衝突が絶えなかったＢ３の発話を示す。

Ｂ３：（今までの自分は）相手の話をあんまり聞くことはしない，そういうタイプだったんです。……今回のことをきっかけに周りの状況に気を遣いながらしましょうって，考えを改めるようになって，行動も気をつけた。……最初は，（大学の成績や学科内順位の）自慢ばかりしてたんですけれども，それが良くないってこと，……今まで自分は何が悪かったのか，そういうことにちょっとだけ気づいた。

次に，第２サブカテゴリー【自国の客観視】には，＜人間を点数で評価する価値基準への疑念＞＜物事を多角的にみるための視座＞が包摂されている。上述の自己に対する客観的な視点の獲得は，個人に関する部分にとどまらず，国家や社会のあり方にまで及んでいた。サークルのリーダーを務めたＢ４と，社会人経験をもつＢ２は，以下のように語る。

Ｂ４：これは，日本語だけを使う大会ではないですよね。チームワークとか，社会の問題とかをずっと話し合って，自分の力にする……ただ言葉を学んで，（JLPT の）Ｎ１とって，（大学の講義で）A+（の単位を）とって，だけじゃ意味ないですよ。（でも韓国では一般的に）それを目指している人が多いですよね。A+ とったら終わり，Ｎ１とったら終わり，１位とったらおしまいって感じの人がいて。

Ｂ２：会社に入ってからは，だいたい仕事は意見を集めて協力してするわけですよね。その部分にこういう活動が本当に役に立つと思います。……（学生時代）ずーっと就職のため個人的な努力だけしていたので，会社に入ってから業務に合わない人が結構います。……私個人の意見ですが韓国の教育の問題点だと思いますよ。

以上のように，学習者たちは，大会への参加を経て物事を多角的にみるための視座を得て，自国で当然とされている価値基準を客観視するに至っていることを確認した。

3-2-2　分析の概要――ストーリーライン

以上の概念，サブカテゴリー，カテゴリーをまとめると，次頁の結果図（図１）のようになる。⇨は影響関係，◀―▶は反対の関係を示している。以下，分析結果の概要であるストーリーラインを示し，解釈を加えてみる。

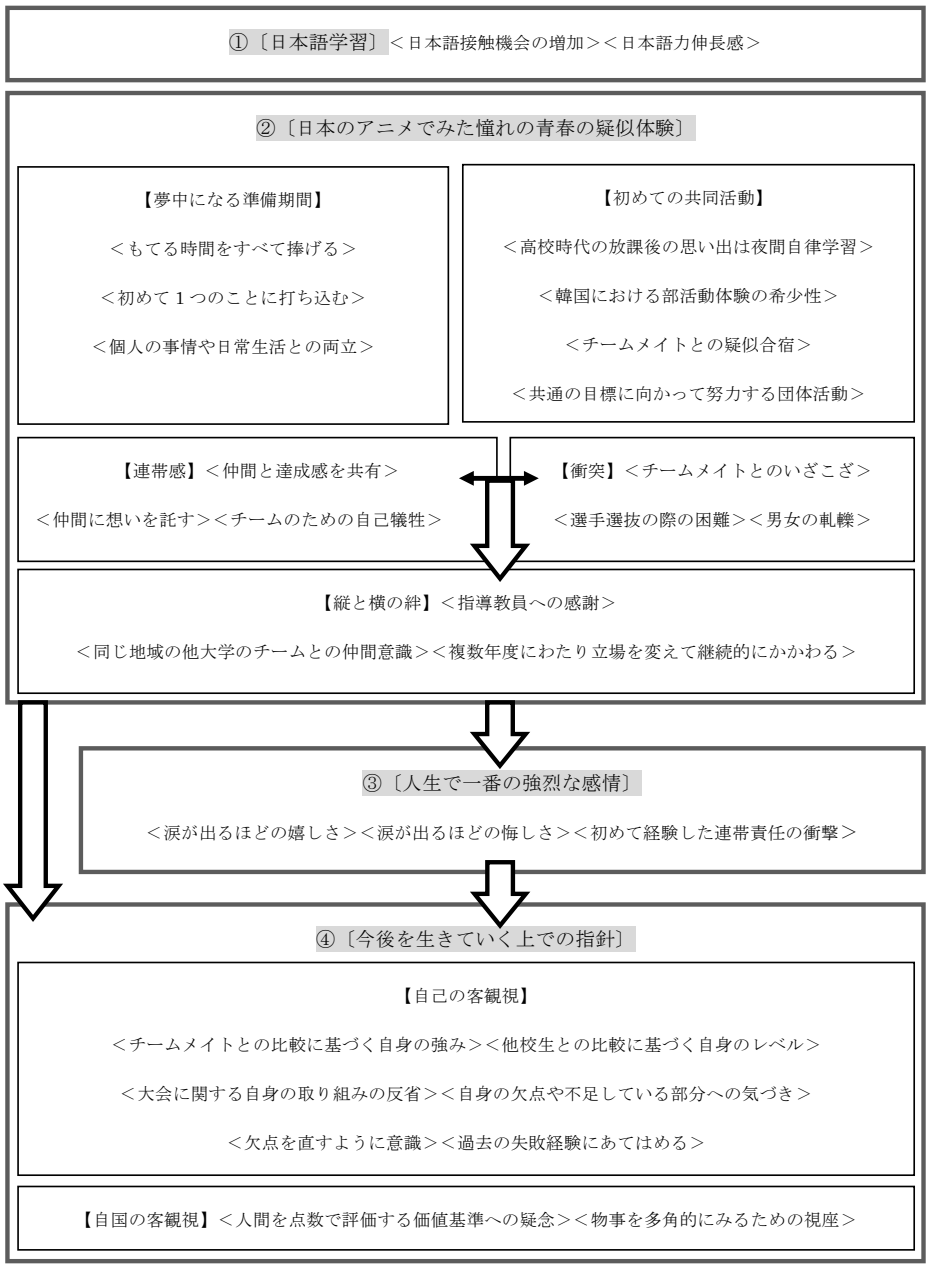

図 1　韓国大学生日本語ディベート大会参加学習者の経験と学び

当初，学習者は＜日本語接触機会の増加＞などの〔日本語学習〕を主な動機として大会に参加しており，大会終了後，たしかに＜日本語力伸長感＞を獲得する。しかし，大会への参加を通じて得られるのは，決してそれのみにとどまらない。

まず，学習者は【夢中になる準備期間】を経験する。＜高校時代の放課後の思い出は夜間自律学習＞しかなかった学習者にとって，＜共通の目標に向かって努力する団体活動＞は【初めての共同活動】である。＜個人の事情や日常生活との両立＞を図り，＜もてる時間をすべて捧げる＞準備期間は，＜初めて１つのことに打ち込む＞経験となる。チームメイトとともに準備を進める中で，ある時は，＜男女の軋轢＞や＜チームメイトとのいざこざ＞，＜選手選抜の際の困難＞といった【衝突】となり，またある時は，＜仲間と達成感を共有＞し，＜チームのための自己犠牲＞を厭わずに＜仲間に想いを託す＞【連帯感】ともなる。そうした＜チームメイトとの疑似合宿＞に譬えられる活動を経て，＜指導教員への感謝＞が芽生え，＜同じ地域の他大学のチームとの仲間意識＞にまで発展する。

さらに，＜複数年度にわたり立場を変えて継続的にかかわる＞ことによって先輩・後輩の輪が広がり，【縦と横の絆】が生み出されてゆく。こうした経験は，＜韓国における部活動体験の希少性＞による，〔日本のアニメでみた憧れの青春の疑似体験〕と理解できる。その体験を通じて，学習者は図らずも〔人生で一番の強烈な感情〕を抱く。大会当日の結果を受けて感じた＜涙が出るほどの嬉しさ＞や＜涙が出るほどの悔しさ＞，さらには＜初めて経験した連帯責任の衝撃＞こそ，この上ない成長の契機となるのだ。

以上の体験によって，学習者は〔今後を生きていく上での指針〕を獲得していく。＜チームメイトとの比較に基づく自身の強み＞や＜他校生との比較に基づく自身のレベル＞を意識しながら＜大会に関する自身の取り組みの反省＞を行い，＜自身の欠点や不足している部分への気づき＞を得た上で，その＜欠点を直すように意識＞させられる。この意識は，自身の＜過去の失敗経験にあてはめる＞という，より真摯な反省へとつながり，最終的には【自己の客観視】が可能になる。さらに，そうした反省は個人に関する領域にとどまらず，＜人間を点数で評価する価値基準への疑念＞を生み，＜物事を多角的にみるための視座＞となり，【自国の客観視】の領域にまで及ぶのである。

4. ま　と　め

韓国大学生日本語ディベート大会の教育効果の検証を終え，まず特筆するべきは，当初からメンバーの協力体制が整い，円満な人間関係の構築に成功していたＡ大学の方ではなく，人間関係上のトラブル続きで，大会直前に至るまでチーム状況が万全ではなかったＢ大学の方が大会成績には恵まれた，という皮肉な現実である。つまりここで総括する教育効果とは，人間関係の良し悪しとも大会の成績如何とも，直接関係しないのである。

今回の調査を通して，全国優勝を成し遂げたＢ大学のみならず，残念ながら地区予選で敗退してしまったＡ大学の学習者たちも，大会参加を極めて有意義と捉えていることが明らか

になった。大会が終わり，自分の欠点を真摯に反省する時間をもち，それを自らの成長につなげたという実感こそ，全国優勝というわかりやすい結果に勝るとも劣らない成果だったからだ。さらに，大会発足時点で日本人教師の側が抱いていた，試験の点数重視，履歴書に記載できるデータ重視の個人主義的な勉強に対する違和感を，大会に参加した韓国人学習者の側も共有するに至っていることが確認された。個人的な勉強によって試験の点数を高め，資格を取得し，「正しい日本語」を身につけたという証明書を獲得したとしても，それで日韓国際交流の現場にうまく参加し，他者と「つながる」ことができるようになるわけではない。いわゆる「21世紀型能力」や「社会人基礎力」を養成するにあたっては，チーム活動を通じて悩む過程と，失敗や挫折に直面して内省する時間が大切なのである。そのことを，教師と学習者という立場の差，日本と韓国という国籍の差を越えた共通の認識とすることができた。現在の自国社会で支配的な価値基準に問題を見出し，それを相対化するという，複眼的に物事を考える力の獲得とは，まさにディベートならではの両面的思考様式の内面化といえよう。

そしてそのような共通理解を生む土壌こそ，日本人教師と外国人学習者が日本語を用いて共に行う日本的な部活動の実践にあった。個人のみならずチーム，結果のみならず過程，事後の内省による人間的成長――これらを重んじる部活動に慣れ親しんだ日本人ならば，今回の調査報告などあまりにも当然に映るかもしれない。だが，文化的土壌が異なる他国において，これは実は全然当たり前のことではないのだ。そうであればこそ，日本人教師たちが一致協力して運営する当大会に参加した学習者たちは，日本のアニメでみて憧れたことの疑似体験ができたとして，貴重に感じているわけである。自身や自国のあり方について複眼的に，かつ主体的に考える力は，そうした異文化体験を通じて獲得されたものと評価することができる。

国際化が進む今日，日本企業による外国籍の人材の受け入れ増加に伴い，外国籍の日本語学習者が日本企業に就職するケースが増えてきている。しかし，いかに高度な日本語能力を身につけても，日本の文化スキーマを共有できていないことによって苦しむ外国籍社員の事例が数多くある（藤，2016）。日本ならではの文化である部活動を疑似体験できる当大会のような教育活動は，将来日本企業への就職を考える外国籍の学習者たちにとって，またとない好機になり得るといえるだろう。

付記
本稿は2016年度日本語教育学会秋季大会での発表をもとに加筆修正したものである。

注

(1) 2012年 9 月第 1 回大会開催。2018年 9 月 4 日現在，第 7 回大会の開催を準備中。大会の詳細はホームペー

ジを参照。URL：http://nihongodebate.wixsite.com/korea

(2) ソウル地区の大学が参加するようになり，全国大会に拡大した第2回大会と前年の第3回大会では，ともにソウル地区大会を勝ち上がったチームが全国優勝していた。

引　用　文　献

アンダーソン・ケント（2010）「日本関連の国際法指導における言語―法律研究と日本語教育は連携可能か―」トムソン木下千尋・牧野成一（編）『日本語教育と日本研究の連携―内容重視型外国語教育に向けて―』ココ出版，pp.99–123.

上條純恵・亀井克朗（2015）「台湾の日本語ディベート事情・概説」井上奈良彦・蓮見二郎・諏訪昭宏（編）『ディベート教育の展望』花書院，pp.20–46.

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂

国際交流基金（2017）『日本語教育 国・地域別情報 韓国（2017年度）』https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/korea.html（2018年9月4日閲覧）

佐藤慎司・熊谷由理（2011）「3つの実践を振り返って―社会参加をめざす日本語教育の未来へ向けて―」佐藤慎司・熊谷由理（編）『社会参加をめざす日本語教育―社会に関わる，つながる，働きかける―』ひつじ書房，pp.277–287.

高橋純子（2015）「ディベートの効果と可能性―『日本語学習Ⅰ』の実践報告―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第30号，pp.299–307.

藤美帆（2016）『日本の企業と大学における国際化の現状―外国人留学生に着目した実証研究―』花書院

西俣（深井）美由紀・熊谷由理・佐藤慎司・此枝恵子（2016）『日本語で社会とつながろう―社会参加をめざす日本語教育の活動集―』ココ出版

松本茂（1996）『頭を鍛えるディベート入門―発想と表現の技法―』講談社

茂木秀昭（2002）『論理力トレーニング―ディベートの技法活用による論理的思考法が身につく本 ―』日本能率協会マネジメントセンター

Stewart, T. & Pleisch, G.（1998）Developing academic language skills and fluency through debate. *The Language Teacher.* *22*（10）, pp. 27–32.

Summary

Educational Practices and Outcomes of "Korean University Student's Japanese Debating Competition": As a Model Case of "Japanese Language Education for Intersocietal Connection" in Foreign Countries

Miho TO, Akihiro SUWA, Yuko FUJIWARA and Hirotaka SUZUKI

This paper reports the educational practice and outcomes of the "Korean University Student's Japanese Debating Competition" and examines the educational effects based on the reactions of the students.　The authors launched this competition in 2012 to provide educational opportunities to foster practical Japanese abilities.

We interviewed students about their experiences in this competition then analyzed the resulting data using a modified version of the Grounded Theory Approach.　The results were categorized into four categories, such as "Guidelines for Living in the Future" which allowed not only the authors but also the students to recognize the importance of the process of working alongside others, through cooperation, by experiencing an example of what it is like in a Japanese club environment.